

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 7 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520370

研究課題名(和文)近代ロシア文学の成立に見る記号としてのヨーロッパの「風景」

研究課題名(英文)European natural landscape as the representation in the process of the formation of the Russian literature

研究代表者

金澤 美知子(Kanazawa, Michiko)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：60143343

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀後半のロシア文学においてヨーロッパの「風景」が果たしている役割、及び「風景」が「絵」、「場面」としてテキストにとり込まれる仕組みを考察した。特にカラムジンとジュコフスキーの作品における「風景」の記述を調査した。

イギリス詩人トムソンの『四季』がロシア文学にもたらした「自然」のイメージに注目し、ジュコフスキーの翻訳とカラムジンの翻訳を比較考察して、前者が詩的翻案的翻訳であり、後者が説明的啓蒙的翻訳である点を指摘した。またカラムジンの自然描写が『四季』の影響の下、自然を享受するよりはむしろ自然のシステムを理解しようとする啓蒙家の世界観を示していることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：During the term of the project the following researches were done to elucidate the role of the European natural landscape in the process of the formation of the modern Russian literature.

(1) The European natural landscapes, which are represented in Russian literary works of the second half of the 18th century and the beginning of the 19th century, were researched. Among the various landscape, the natural scenery of Goethe's 《Die Leiden des jungen Werthers》 and the Lake Reman in Rousseau's 《Julie ou la Nouvelle Heloise》 charmed many Russian writers and readers of those period. We paid the particular attention to the scenery.

(2) Works of Nicolai Karamzin, one of the most famous Russian Sentimentalists, were analyzed carefully. Especially in his Russian translation of James Thomson's Seasons, in which not only landscapes' beauty, but also philosophical meditation about nature is represented, we would find him getting Western understanding of nature.

研究分野：ロシア文学、ロシア文化

キーワード：ロシア ヨーロッパ 18世紀 自然風景 翻訳 カラムジン センチメンタリズム ロマン主義

1. 研究開始当初の背景

近代ロシア文学成立(18世紀後半～19世紀初頭)の経緯については、今日に至るまで国内外の研究において見解の一致が見られない。この問題をめぐってはロシア民衆文学(フォークロア)の伝統と西欧の影響が対比的にとり上げられ、ソビエト期ロシアの国文学史では前者の圧倒的優位が主張され、一方、欧米の研究では概ね後者の役割が強調されてきた。近年は西欧文化の影響を認める見解が世界的に定着しているが、しかし歴史分野に比して芸術文化、特に文学ジャンルの調査は大幅に遅れ、近代ロシア文学の成立は依然、「ロシア対ヨーロッパ」という二項対立の構図によって理解されるに留まり、両者の結びつきに関する妥当な説明はなされていない。

本課題は、作品の中に現れた「風景」という指標を手がかりにヨーロッパとロシアの有機的連関を考察し、近代ロシア文学の成立のプロセスについての新しい視点を提唱するものである。

本研究課題の申請者は以前より近代ロシア文学形成のプロセスに強い関心を持ち、平成15～17年度科研補助金「近代ロシア文学の誕生とパトロンたちの文化史」と平成19～21年度科研補助金「手紙の文化に見る近代ロシア文学の成立過程」を受けての研究では、日本における18世紀ロシア研究の前進に微力ながら貢献することができた。しかしこれらの研究では文学スタイルの変化を主に外在的要因(社会的背景)によって説明しようとしたため、解決できない問題も数多く残った。問題を解決するための糸口を探していたところ、ロシア最初の書簡体小説、フォードル・エミンの『エルネストとドラウヴラの手紙』や、センチメンタル小説の代表的作品であるH.カラムジン『エヴゲニイとユリア』、B.B.イズマイロフ『ロストフの湖』と出会い、ヨーロッパ「風景」の取り込みが文学的手法の変化を知る有効な指標となっていることに気づき、新たな角度からの調査が必要であるとの思いを強くした。

本研究では近代ロシア文学成立の経緯を内在的要因すなわち創作技法の発展に即して考察する。社会的コンテクストも視野に入れるが、文学テキストの手法的变化が近代ロシアの社会的心性の確立を促したとする立場をとっている。従って本課題はこれまでの研究とは相互補完の関係にあると言えるだろう。

2. 研究の目的

本研究は近代ロシア文学が成立する過程(18世紀後半～19世紀初頭)に於いて、ヨーロッパの自然風景をめぐるイメージ、自然風景についての理解が重要な役割を果たしたとの認識に拠っている。

そして、作品へのヨーロッパ「風景」の取り込みが創作技法を大きく変化させた点に注目し、その際に「風景」が単なる現実の個別の情報としてでなく、当時の読者の美意識や世界観と結びついた「記号」として用いられていたことを明らかにするものである。記号としてのヨーロッパの「風景」は作品の構成と文体、時間と空間の演出に多大の影響を与え、それ以前とは異なった新しい物語の場を実現することになった。近代ロシア文学の成立と発展にヨーロッパの「風景」が果たした役割を具体的に検証することは、ロシア文学の近代化のプロセスに対する理解を確実にする作業であると考えられる。

3. 研究の方法

近代ロシア文学成立期のテキストに見られるヨーロッパの「風景」は必ずしも現実の模写ではなく、読者の美意識を示す記号として機能しているため、無数に存在するわけではない。従って考察に際しては、18世紀イギリス美学の理論とロマン主義文学の「風景」、ゲーテ『若きヴェルテルの悩み』がもたらした「風景」、J.-J. ルソー『新エロイズ』とレマン湖の「風景」を手がかりとした。

具体的には主に次のような作業を行った。

- (1) 18世紀ヨーロッパ文学における「ピクチャレスク」の概念とそれが近代ロシアの社会的心性および文学作品に果たした役割を考察し、さらにロマン派が好んだ「風景」についても確認した。
- (2) ロシアと接点をもつ18世紀イギリスの芸術家についての調査、及び18世紀末から19世紀初頭のイギリス文学における「風景」の考察を行った。
- (3) ゲーテ『若きヴェルテルの悩み』(1774)は18世紀末にロシア語訳が版を重ね、ロシア・センチメンタリズムの文学の新たな展開の契機となった作品である。また他の作品をロシアに紹介する役割も果たした。本研究では、西ヨーロッパとロシアの中継点としてド

イツ文学が果たした役割を念頭におきつつ、特に『ヴェルテル』に見られる屋外の「風景」がロシア・センチメンタリズムの「絵」に与えた影響を考察した。

(4) ゲーテと並んでルソーの著作は 1760 年代以後のロシア文学に大きな影響を与えた。影響は多岐に亘ったが、ここでは『新エロイズ』(1761)が提供したレマン湖一帯の「風景」がロシア文学の中で「理想世界の表象」として記号化されていた点に注目した。

(5) 1760～1810 年代のロシア文学を概観し、作品の中に持ち込まれたヨーロッパの「風景」を上記の諸作業との関連に於いて考察した。また可能な範囲で、ロシア作品に持ち込まれた「風景」と他文化圏の作品の「風景」を比較してロシア的変容について考察し、作品が書かれた時期による変化についても明らかにすることを試みた。

4. 研究成果

18 世紀末～19 世紀初頭ロシア文学の中から、ヨーロッパの自然風景が扱われている文学テキストをとりあげ、ヨーロッパの「風景」が果たしている役割、及び「風景」が「絵」「場面」としてテキストに取り込まれる仕組みの基本的傾向を考察した。

センチメンタリスト、特にカラムジンとジュコフスキーの作品をとりあげ、「風景」の記述および関連する視覚的な叙述を調査した。さらに、カラムジンの作品に関しては、彼が J. トムソン『四季』、レッシング『エミリア・ガロッチィ』、シラー『運命の戯れ』等、18 世紀の西欧の作品を数多く翻訳していることに注目し、原典と翻訳との間の差異や描写の傾向などを考察した。

さらに、ロシア・センチメンタリズムの代表的作家であるニコライ・カラムジンのトムソン『四季』の翻訳の分析を通して、彼の自然観がヨーロッパ文化に培われたものであることを指摘した。

ニコライ・カラムジンは『哀れなリーザ』や『ポルンホルム島』で物語の展開に自然風景を効果的に利用しているが、それは単に従来言われてきたような、「人間の心理描写を自然との交感を通して実現する」という方法においてだけではない。自然のシステムを理解し、物語の個々の「場面」の中に際立たせることを試みた点に彼の特徴があり、これはヨーロッパ文化における自然風景の演出に倣うところが大きかった。彼はトムソン『四

季』の翻訳では、そこに描かれた自然のシステムを忠実に再現することを心がけている。ヨーロッパ文化の影響を示すカラムジンのこの自然理解と自然の演出は、ロシア近代文学の形成に功績をなした重要な例である。

なお、本研究期間中の成果の一部は報告及び論文によって発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

金沢美知子、ドストエフスキー『白夜』における 18 世紀の「甘美な憂鬱」、SLAVISTIKA、査読無、30 号、2015、pp.55 - 65

安西信一、庭を侵す病 『infection』の映像世界、ユリイカ、査読無、第 45 巻 6 号、2013、pp.155-166

安西信一、リチャード・ペイン・ナイト『風景』 解説と翻訳(1)、美学芸術学研究、査読無、30 号、2012、pp.185 - 294

宮田眞治、イエナ・ロマン主義における<能動・受動>モデルの問題、ヘーゲル哲学研究、査読無、18 号、2012、pp.19 - 32

安西信一、コテージ・ガーデン 内向するイングリッシュネス(2)、美学芸術学研究、査読無、29 号、2011、pp.135 - 169

[学会発表](計 3 件)

宮田眞治、Zur Figur des Fremden in Chrono-Topographie Lichtenbergs、韓国独文学会(招待講演)、2013 年 9 月 27 日～9 月 29 日、韓国

金沢美知子、18 世紀ロシアにおける「公」と「私」を論じる 恋愛小説における「社会」の役割、日本 18 世紀ロシア研究会、2012 年 09 月 25 日、東京大学

金沢美知子、Russian sentimentalism and the motif of 'the prodigal daughter'、ロシア言語文学国際会議 2011(招待講演)、2011 年 12 月 2 日、Tamkang University, Taiwan

[図書](計 2 件)

宮田眞治、野崎歡編『文学と映画のあいだ』(共著)、東大出版会、2013、p.244

安西信一、「庭園の中の道具 桂離宮外腰掛をめぐる」、西村清和編『生活環境の美学』、勁草書房、2012、pp.99 - 124

[その他]

日本 18 世紀ロシア研究会運営、第 9 回、第 10 回研究会の開催

日本 18 世紀ロシア研究会年報 No.8,9,10
号の発行

6 . 研究組織

(1)研究代表者

金沢 美知子 (KANAZAWA, Michiko)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号： 6 0 1 4 3 3 4 3

(2)研究分担者

安西 信一 (ANZAI, Shin'ichi)
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号： 5 0 2 3 2 0 8 8

(研究期間中の死去により、平成 26 年度は研究
分担者リストから削除)

(3) 研究分担者

宮田眞治 (MIYATA, Shinji)
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号： 7 0 2 2 9 8 6 3